

華嚴系論書に引用される『無量寿経論』について

辻本俊郎

一、序

世親 (Vasubandhu, 天親、婆薮槃豆とも漢訳される) の『無量寿経論』(『浄土論』とも『往生論』とも通称される⁽¹⁾)。以下、『論』とする) は、多くの論者たちに引用されてきた。以前筆者は、『論』テキストの字句の異同、改行箇所などを検討して、『論』テキストの系譜を明らかにした⁽²⁾。そして、現在、筆者は他論書に引用される『論』が右記のどの系統のものであるのかを明らかにすることによって、『論』の流伝を探ろうとする研究に取り組んでいる。

柴田泰氏は、『論』流伝について、「浄影寺慧遠以降、道綽・迦才・善導・懷感等の浄土系のみでなく、天台系の智顛偽撰・知礼・宗曉、華嚴系の智儼・元曉・延寿、律系の道世・元照、法相系の基(偽撰)・憬興、密教系の慧林などあらゆる法系の諸師に引用され⁽³⁾」ていることを明らかにしている。

その中で本小論では華嚴系(智儼、元曉、延寿)の論書に引用される『論』は果してどの系統のものであったのか検討し、引いては『論』流伝に関する問題解決の一指針としたい。

二、智儼『華嚴經内章門等雜孔目』に引用される『論』について

智儼（六〇二一六六八）の『華嚴經内章門等雜孔目』巻第四には以下に示すように『論』の引用が多く見られるのである。

又往生論。（中略）畢竟得生安樂国土見阿弥陀仏。一者礼拝門。二者讚歎門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門。云何礼拝。身業礼阿弥陀如来正遍知。為生彼国意故。云何讚嘆。口業讚嘆。称彼如来名。如彼如来光明智相。如彼名義。欲如実修行相应故。云何作願。心常作願。一心專念畢竟往生安樂国土。欲如実修行奢摩他故。云何觀察。智慧觀察。正念觀彼。欲如実修行毘婆舍那故。広如論説。云何迴向。（中略）復有五種門。漸次成就五種功德。一者近門。二者大衆門。三者宅門。四者屋門。五者園林遊戲地門。初四種門。成就入功德。第五門成就出功德。入第一門者。以礼拝阿弥陀仏為生彼国故。得生安樂世界。入第二門者。以讚嘆阿弥陀仏。隨順名義。称如来名。依如来光明相心修行故。得入大会衆數。入第三門者。以一心專念作願生彼。修奢摩他寂靜三昧行故。得入蓮華藏世界。入第四門者。以專念觀察彼妙莊嚴。修毘婆舍那故。得到彼処受用種種法味樂。出第五門者。以大慈悲。觀察一切苦惱衆生。示応化身。迴入生死園煩惱林中。遊戲神通至教化地。以本願力迴向故。菩薩如是修五門行。速得成就阿耨多羅三藐三菩提⁴。

この中で、『華嚴經内章門等雜孔目』に引用される『論』はどの系統のものであるのかを示唆するのは次にあげる八箇所である。

① 「一者礼拝門。二者讚歎門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門」

この文の諸系統を見ると、

A (宋版) 系統 「一者礼拝。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向」

B (高麗版) 系統 「一者礼拝門。二者讚歎門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門」

C (論註) 系統 「一者礼拝門。二者讚嘆門。三者作願門。四者觀察門。五迴向門」

となっており、ここでは「歎」「嘆」という字句、「門」の出入からB系統を示唆していると考えられる。

② 「身業礼阿弥陀如来応正遍知」

この文の諸系統を見ると、

A 系統 「身業礼阿弥陀仏如来応正遍知」

B 系統 「身業礼阿弥陀如来応正遍知」

C 系統 「身業礼阿弥陀如来応正遍知」

となっている。したがって、ここでは「仏」という字句の出入からB系統、C系統を示唆している。

③ 「云何讚嘆。口業讚嘆」

この文の諸系統を見ると、

A 系統 「云何讚歎。口業讚歎」

B 系統 「云何讚歎。口業讚歎」

C 系統 「云何讚嘆。口業讚嘆」

となっている。ここでは①の事例（「歎」「嘆」とは異なり、C系統を示唆している。

④「以讚嘆阿弥陀仏」

この文の諸系統を見ると、

A系統 「以讚歎阿弥陀仏」

B系統 「以讚歎阿弥陀仏」

C系統 「以讚嘆阿弥陀仏」

となっている。ここでは③（「云何讚嘆。口業讚嘆」）と同様C系統を示唆している。

⑤「依如来光明相心修行故得入大会衆数」

この文の諸系統を見ると、

A系統 「依如来光明相修行故得入大会衆数」

B系統 「依如来光明想修行故得入大会衆数」

C系統 「依如来光明智相修行故得入大会衆数」

となっており、『華嚴経内章門等雜孔目』に引用される「論」と一致するものはない。

⑥「以一心専念作願生彼」

この文の諸系統を見ると、

A系統 「以一心専念作願生彼」

B系統 「以一心専念作願生彼」

C系統 「以一心専念作願生彼国」

とあり、ここではA系統、あるいはB系統を示唆している。

⑦ 「以大慈悲觀察一切苦惱衆生示応化身」

この文の諸系統を見ると、

A 系統 「以大慈悲觀察一切苦惱衆生示応化身」

B 系統 「以大慈悲觀察一切苦惱衆生亦応化身」

C 系統 「以大慈悲觀察一切苦惱衆生示応化身」

とあり、ここでは A 系統、あるいは C 系統を示唆している。

⑧ 「菩薩如是修五門行」

この文の諸系統を見ると、

A 系統 「菩薩如是修五門行」

B 系統 「菩薩如是修五門行」

C 系統 「菩薩如是修五念門行」

とあり、ここでは C 系統を示唆している。⁵⁾

以上の考察から『華嚴經内章門等雜孔目』に引用される『論』は、ある箇所では A (宋版) 系統を示唆し、また別の箇所では B (高麗再雕版) 系統、あるいは C (『論註』に引用される『論』) 系統を示唆しているので、どの系統の論であるのか、という確答は得られない。

三、元曉『仏説阿弥陀經疏』に引用される『論』について

元曉(六一七―六八六)『仏説阿弥陀經疏』に引用される『論』は以下の通りである。

論説二乗種不生。

は無諸難功德成就。如論頌言。永離身心悩受樂常無間故。(中略)是莊嚴地功德成就。如論頌言。雜華異光色宝欄遍圍繞故。(中略)是莊嚴水功德成就。(中略)是種種事功德成就。如論頌言。備諸珍宝性具足妙莊嚴故。

(中略)莊嚴妙色成就功德。如論頌言。無垢光炎熾明淨耀世間故。(中略)愛樂仏法味禪三昧為食故。(中略)

大乘善根男等無譏嫌名。女人及根欠二乗種不生故。(中略)莊嚴虚空功德成就者。偈言無量宝交絡羅網虚空中。種種鈴鬘響宣吐妙法音故。二者莊嚴性功德。如論說言。莊嚴性功德成就者。偈言正道大慈悲出世善根故。(中略)莊嚴清淨功德成就者。偈言觀彼世界相勝過三界道故。(中略)論云。莊嚴眷属功德成就者。偈言如来淨華衆正覺華生故。(中略)論言。何者莊嚴大衆功德成就。偈言人天不動衆清淨智海生故。(中略)言何者莊嚴上首功德成就。偈言如須弥山王勝妙無過者故。(中略)言大乘善根男等無譏嫌名。

この中で、元曉『仏説阿弥陀經疏』に引用される『論』はどの系統のものであるのかを示唆するのは次にあげる十一箇所である。

①「莊嚴地功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統「莊嚴地」

B系統「莊嚴地」

C系統「莊嚴地功德成就」

とあり、ここではC系統を示唆している。

②「雜華異光色宝欄遍圍繞故」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統「雜華異光色宝欄遍圍繞故」

B系統「雜華異光色宝欄遍圍繞故」

C系統「雜華異光色宝欄遍圍繞故」

とあり、ここではA系統、あるいはB系統を示唆している。^⑧

③「莊嚴水功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統「莊嚴水」

B系統「莊嚴水」

C系統「莊嚴水功德成就」

とあり、ここではC系統を示唆している。

④「莊嚴妙色成就功德」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「妙色功德成就」

B系統 「妙色功德成就」

C系統 「莊嚴妙色功德成就」

とあり、ここでは『仏説阿弥陀經疏』に引用される『論』と一致するものはないが、強いていえば、C系統のものが近いと言える。

⑤ 「大乘善根男等無譏嫌名女人及根欠二乘種不生故」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「大乘善根界等無譏嫌名女人及根欠二乘種不生故」

B系統 「大乘善根界等無譏嫌名女人及根欠二乘種不生故」

C系統 「大乘善根界等無譏嫌名女人及根欠二乘種不生故」

とあり、『仏説阿弥陀經疏』に引用される『論』と一致しない。しかしながら、高麗再雕版では「大乘善根界 天台智者即界字乃男字錯。則宜改作。而諸疏家皆作界字。故存之」⁹⁾とあり、天台智者は「大乘善根界」の「界」の字は「男」の字の誤りであるとす。

⑥ 「莊嚴虛空功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「莊嚴虛空」

B系統 「莊嚴虛空」

C系統 「莊嚴虛空功德成就」

とあり、ここではC系統を示唆している。

⑦ 「莊嚴性功德成就者」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「性功德成就者」

B系統 「性功德成就者」

C系統 「莊嚴性功德成就者」

とあり、ここでもC系統を示唆している。

⑧ 「莊嚴清淨功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「清淨功德成就」

B系統 「清淨功德成就」

C系統 「莊嚴清淨功德成就」

とあり、ここでもまたC系統を示唆している。

⑨ 「莊嚴眷属功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「眷属功德成就」

B系統 「眷属功德成就」

C系統 「莊嚴眷属功德成就」

とあり、ここでもC系統を示唆している。

⑩ 「何者莊嚴大衆功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「何者衆莊嚴」

B系統 「何者衆莊嚴」

C系統 「何者莊嚴大衆功德成就」

とあり、ここでもC系統を示唆している。

⑪ 「莊嚴上首功德成就」

この文の『論』テキストを見ると、

A系統 「上首莊嚴」

B系統 「上首莊嚴」

C系統 「莊嚴上首功德成就」

とあり、ここでもC系統を示唆している。

以上、十一箇所の中で①③④⑥⑦⑧⑨⑩⑪の九箇所から、『仏説阿彌陀經疏』に引用される『論』はC系統のものであると考へてはば間違いない。

四、元曉偽撰『遊心安樂道』に引用される『論』について

・『遊心安樂道』元曉偽撰（八世紀以降）に引用される『論』は以下の通りである。

而論説曰。女人根欠。二乗種不生。¹⁰

往生論中。説五門行。¹¹

若往生論明五因行。如彼論云。若善男子善女人。修五念門行成就。畢竟得生安樂国土。見彼阿彌陀仏。何等五念門。一者禮拜門。二者讚嘆門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門。云何禮拜。身業禮拜阿彌陀如来。正遍知。為生彼國故。云何讚嘆。口業讚嘆。稱彼如来名。如彼如来光明智相。如彼名義。欲如實修行相應故。云何作願。心常願。一心專念。畢竟往生安樂国土。欲如實修行奢摩他故。云何觀察。智慧觀察。正念觀彼。欲如實修行毘婆舍那故。一觀仏國功德。二觀仏功德。三觀菩薩莊嚴功德。云何迴向。不捨一切苦惱衆生。心常作願。迴向為首。得成就大慈悲心故。¹²

天親論云。女人及根欠。二乗種不生。¹³

如往生論云。女人及根欠。二乗種不生。¹⁴

この中で、『遊心安樂道』に引用される『論』はどの系統のものであるのかを示唆するのは次にあげる六箇所である。

① 「修五念門行成就」

A系統 「修五念門成就者」

B系統「修五念門成就者」

となっており、

C系統「修五念門行成就」

となっているので、ここではC系統を示唆している。

②「何等五念門。一者礼拝門。二者讚嘆門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門」

A系統1「何等五念。一者礼拝。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向」

となっており、

A系統2「何等五念門。一者礼拝。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向」

A系統3「何等五念門。一者礼拝。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向」

B系統「何等五念門。一者礼拝。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向」

となっている。それに対して、

C系統「何等五念門。一者礼拝門。二者讚嘆門。三者作願門。四者觀察門。五迴向門」

となっている。ここでもC系統を示唆している。

③「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」

A系統「身業礼拝阿弥陀仏如来応正遍知」

これに対して、

B系統「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」

C系統「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」

となっており、ここではB系統、あるいはC系統を示唆している。

④ 「云何讚嘆。口業讚嘆」

A系統 「云何讚歎。口業讚歎」

B系統 「云何讚歎。口業讚歎」

となっており、

C系統 「云何讚嘆。口業讚嘆」

となっている。C系統を示唆している。

⑤ 「三觀菩薩莊嚴功德」

A系統 「三者觀察彼諸菩薩功德莊嚴」

B系統 「三者觀察彼諸菩薩功德莊嚴」

となっているのに対して、

C系統 「三者觀察彼諸菩薩莊嚴功德」

となっており、ここでもC系統を示唆している。

⑥ 「不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首得成就大慈悲心故」

A系統 「於彼觀察一切世間苦惱衆生同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧方便作願迴向撰取衆生不捨一切世間故」

とあり、

B系統 「不捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首成就大慈悲心故」

〔C系統〕「捨一切苦惱衆生心常作願迴向為首得成就大慈悲心故」

となっており、B系統とC系統の相違は「得」の出入のみであるが、明らかにC系統を示唆している。

以上のことから、『遊心安樂道』に引用された『論』はC系統のものではないかと考えられる。

五、延寿『宗鏡録』に引用される『論』について

・延寿（九〇四―九七五）『宗鏡録』に引用される『論』は以下の通りである。

天親云。広略相入者。諸仏有二種身。一法性法身。二方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出

法性法身。此二種身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。¹⁶⁾

ここで、延寿は「天親云」として「広略相入者云々」と引用しているが、『論』にはこのような記述はない。それでは、延寿は何を引用しているのかと言え、曇鸞の『論註』を引用して「天親云」としているのである。『論註』の相応文をあげると、

広略相入諸仏菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身生方便法身。由方便法身出法性法身。此二法身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。¹⁷⁾

とある。多少の字句の異同はあるが、延寿は『論』ではなく、『論註』そのものを参照していたことが窺えよう。

しかしながら、柴田泰氏は『宗鏡録』に引用される『論』というのは道綽（五六二―六四五）『安樂集』の孫引きではないかと考えている。そこで、『宗鏡録』に引用される『論（註）』、曇鸞の『論註』、『安樂集』に引用される

『論（註）』¹⁸⁾を対比させてみよう。

『宗鏡錄』に引用される 『論(註)』	広略相入者諸仏有二種身。 一法性法身。 二方便法身。 由法性法身故生方便法身。 由方便法身故顯出法性法身。
『論註』	広略相入諸仏菩薩有二 一者法性法身。 二者方便法身。 由法性法身生方便法身。 由方便法身出法性法身。
『安樂集』に引用される 『論(註)』	広略相入者但諸仏菩薩 有二種法身。 一者法性法身。 二者方便法身。 由法性法身故生方便法身。 由方便法身故顯出法性法身。

このように『宗鏡錄』に引用される『論(註)』と『安樂集』に引用される『論(註)』は完全には一致しないが、柴田氏の見解もまた否定できない。しかしながら、いずれにせよ、延寿は『論註』の文を引用していることは明白

である。

五、その他に引用される『論』

・以上、採り上げたもの以外に華嚴系には元曉の『両卷無量寿経宗要』、延寿の『萬善同帰集』巻上に『論』が引用されている。

まず、元曉『両卷無量寿経宗要』に引用される『論』は以下の通りである。

論説云。女人及根欠。二乗種不生者。是説決定種性二乗。非謂不定根性声聞。為簡此故。名二乗種。由是義故。不相違也。又言女人及根欠者。謂生彼時。非女非根欠耳。非此女等不得往生。如韋提希而得生故。²⁰ 往生論中説五門行。

そして、延寿『萬善同帰集』に引用される『論』は以下の通りである。

往生論云。遊戲地獄門者。生彼国土得無生忍已。還入生死国。教化地獄。救苦衆生。以此因縁求生淨土。²²

これら元曉『両卷無量寿経宗要』、延寿『萬善同帰集』に引用される『論』はどの系統のものを参照したのかを示唆する文を引用していないので結論を下すことはできないが、『仏説阿弥陀経疏』に引用された『論』からすれば、元曉『両卷無量寿経宗要』はC系統を、『宗鏡録』に引用されたのが「天親云」といながらも『論註』を引用していることから考えて延寿『宗鏡録』は『論註』そのものを参照したのであろう。

六、結び

以上、考察したことをまとめると、

- ① 『華嚴経内章門等雜孔目』に引用される『論』は、ある箇所ではA系統を示唆し、また別の箇所ではB系統、あるいはC系統を示唆しているので、智儼が参照したのはおそらくそれらと全く別系統のものであったであろう。
 - ② 元曉『仏説阿弥陀経疏』に引用される『論』はC系統のものであると考えてほぼ間違いない。
 - ③ 『遊心安楽道』に引用された『論』はC系統のものではないかと考えられる。
 - ④ 延寿は『論』ではなく、『論註』そのものを引用している。
 - ⑤ 元曉『両卷無量寿経宗要』に引用される『論』はどの系統のものを参照したのかを示唆する文を引用していないので結論を下すことはできないが、『仏説阿弥陀経疏』に引用された『論』からすれば、元曉『両卷無量寿経宗要』に引用された『論』はC系統のものであろう。
 - ⑥ 延寿『宗鏡録』に引用される『論』は、元曉『両卷無量寿経宗要』と同様にどの系統のものを参照したのかを示唆する文を引用していないので結論を下すことはできないが、『宗鏡録』に引用されたのが「天親云」といいながらも『論註』を引用していることから考えて延寿『宗鏡録』は『論註』そのものを参照したのであろう。
- 今後、筆者は、他論書に引用される『論』の系統を明らかにし、さらには、『論』に対する見解の相違を通して、諸師の『論』観の特徴を探りたいと考えている。

註

- (1) 『論』の具名については、拙稿〔二〇〇〇〕参照されたい。
 (2) 拙稿〔一九九九〕。また、本小論で言うところのA系統、B系統、C系統についても拙稿〔一九九九〕を参照されたい。

(3) 柴田泰〔一九九六〕。

(4) 大正45・五七七下―五七八上。

(5) この箇所の子句の異同による思想的考察に関しては拙稿〔二〇〇〇〕を参照されたい。

(6) 大正37・三四八中。

(7) 大正37・三四九上―三五〇上。

(8) 「欄」と「蘭」の子句の異同については、拙稿〔二〇〇〇〕参照されたい。

(9) 大正26・二三三上。

(10) ここでは、『大正』を使用した、韓普光(泰植)〔一九九一〕の中に校訂『遊心安樂道』(大正本、来迎院本、関連文より校訂したもの)があるので、これも参照した。

『遊心安樂道』の著者については、定説を見ない。中国成立説、新羅成立説、日本成立説とある。これに関しては以下の論考を参照。

- ・愛宕邦康〔一九九四〕、
- ・落合俊典〔一九八〇〕、
- ・韓普光(泰植)〔一九九一〕、

・章輝玉（一九八五）（一九九二）。

また、書誌学的研究に関しては、次の論考を参照。

・落合俊典（一九八八）（一九八九）、

・韓普光（泰植）（一九九二）。

(11) 大正47・一一二上。

(12) 大正47・一一四上。

(13) 大正47・一一五中一下。

(14) 大正47・一一八中。

(15) 大正47・一一九上。

(16) 大正48・五三五中。

(17) 真宗勸学寮編（一九二五）下卷三九頁。

(18) 柴田泰（一九九六）。

(19) 『安楽集』に引用される『論』に関しては岸一英氏が「道綽は『浄土論』といながらも『論註』の文を引用していることからして、その区別をなしていないことが知られる。『論註』の引用は中国において『安楽集』が最初である。ただし、道綽は『論』だけを見て論じているのではなく、『論註』のみを見て『安楽集』に引用していることに注意しなければならない。この点に関してはいづれ稿を改めて述べてみたい」としている（岸一英（一九九九））。

(20) 大正37・一二六中。

(21) 大正37・一二八中。

華嚴系論書に引用される『無量寿経論』について

(22) 大正48・九六六中。

参考文献

- 愛宕邦康〔一九九四〕…『遊心安樂道』の撰述者に関する一考察―東大寺華嚴僧智憬との思想的関連に着目して―
『南都佛教』第70号
- 稻城選恵〔一九七六〕…『浄土論序説』百華苑
- 落合俊典〔一九八〇〕…『遊心安樂道の著者』『研究紀要』25号、華頂短期大学
- 落合俊典〔一九八八〕…『遊心安樂道諸本攷』『研究紀要』33号、華頂短期大学
- 落合俊典〔一九八九〕…『遊心安樂道』の諸本について』仏教論叢33号、浄土宗教学院
- 韓 普光(泰植)〔一九九一〕…『新羅浄土思想の研究』東洋出版
- 岸 一英〔一九九九〕…『無量寿経論』校異の意義』『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所「浄土教の総合的研究」
研究班編。
- 柴田 泰〔一九九六〕…『中国仏教における『浄土論』』『浄土論註』の流传と題名(一)』『印度哲学仏敎学』第11号
- 柴田 泰〔一九九七〕…『中国仏教における『浄土論』』『浄土論註』の流传と題名(二)』『印度哲学仏敎学』第12号
- 章 輝玉〔一九八五〕…『遊心安樂道』考』『南都佛教』第54号
- 章 輝玉〔一九九二〕…『新羅の浄土教』『浄土仏敎の思想』六、講談社
- 『浄土教の総合的研究』研究班編(一九九九)…『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所

真宗勸学寮編〔一九二五〕…『浄土論註校異』真宗勸学寮

真宗教学研究所編〔一九七二〕…『浄土論註總索引』東本願寺出版部

大藏会編〔一九六四〕…『大藏経―成立と変遷』百華苑

高瀬承厳〔一九一七〕…『類本往生論に就きて』『仏書研究』第29号

辻本俊郎〔一九九九〕…『無量寿経論』テキスト考』『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」

研究班編

辻本俊郎〔二〇〇〇〕…『無量寿経論』テキストの検討』佛教大学仏教学会第8号

辻本俊郎〔二〇〇一①〕…『無量寿経論』願生偈の文献学的研究』佛教大学仏教学会第9号

辻本俊郎〔二〇〇一②〕…『天台系論書に引用される『無量寿経論』について』追手門学院大学文学部アジア文化学科

年報第4号

辻本俊郎〔二〇〇一③〕…『往生要集』に引用される『無量寿経論』について』印度学仏教学研究第50巻第1号

幡谷 明〔一九八九〕…『曇鸞教学の研究―親鸞教学の思想的基盤―』『資料篇』同朋舎

